

Contents *****

特集：インド外交とグローバルサウスの論理	1p
＜海外報道ウォッチ＞	
バイデン大統領は2期目を断念すべきなのか	7p
＜From the Editor＞ 祝！阪神タイガース優勝	9p

特集：インド外交とグローバルサウスの論理

やや時間は空きましたが、本号ではニューデリーで行われた G20 首脳会議の顛末を振り返ってみたいと思います。そこで発揮されたインド外交は、われわれ「G7」や「西側」の思考法から外れたものでありました。「グローバルサウスの盟主」を目指す、なるほどこういう発想になるのか、と教えられたような気がします。G20 や BRICS のメンバー構成も、あらためて考えると非常に奇妙なことになっていることに気づかされます。

他方では、「グローバルサウスを味方に付ける」という中国とロシアの狙いは空振りに終わったようです。水面下で繰り広げられた中国とインドの外交戦は、インドが勝利したのではないのでしょうか。面白い勝負であったな、と感じています。

●ニューデリー-G20 首脳会議を終えて

まず最初に、9月 9-10 日にニューデリーで行われた G20 首脳会議の顛末を振り返るところから始めよう。

初日のうちに共同宣言が出た、という点がサプライズであった。衆目の一致するところ、今年も共同宣言をまとめること自体が至難の技であった。8月 31 日の日経「経済教室」では、鈴木一人教授が「ロシアによるウクライナ侵略以降、米ロが参加する会議は統一的な見解を得ることが極めて難しい」と予想している（G20 サミットの焦点「国際秩序の維持困難 明白に」）。中ロと米国とグローバルサウスが別々の方向を向いている中で、日本と欧州が「ルールに基づく秩序」を主張しても簡単には通らない、というのである。

そして去年のバリ G20 サミットでは、議長国のインドネシアが周到な根回しをして、ロシアを非難する声明をまとめあげた。西側におけるジョコ大統領の評価は非常に高かった。今年も「その上」を目指さなければならないことになるから、議長国インドにとってのハードルはかなり高いはずであった。

ところが共同宣言はあっけなくまとまった。感心して現物（日本語訳）¹を見に行くと、「これなら出せるよなあ…」と言いたくなるような無難な線²でまとめられていた。たぶんロシアのラブロフ外相は上機嫌であったことだろう。「ウクライナ戦争」ではなくて、「ウクライナにおける戦争」だし、「全ての国は…領土取得を追求するための武力による威嚇または武力の行使は慎まねばならない」とあるけれども、これは特定の国を指しているわけではない。ロシアはほとんど非難されていないのである。

その代わりと言っては何だが、前段の部分で「バリでの議論を想起しつつ」などという文言が入っている。これは「去年の共同宣言のことも忘れてないですよ」というポーズであろう。ただし昨年バリ宣言から比べれば実施手的な後退であって、G7側から見れば失望を禁じ得ないことになる。

とはいうものの、モディ首相は最初からそんなことで汗をかくつもりはさらさらなかったのであろう。インドの目線は、徹頭徹尾「グローバルサウス」にあった。そしてG20会合は、2024年はブラジルが議長国で、2025年は南アである。BRICS内の民主主義国が3年連続で続く。議長国は、前年と翌年を併せた3か国が「トロイカ」を組んで議事運営に当たるので、この先、しばらくG20は「グローバルサウス目線」になるのであろう。

ちなみに、2025年の南ア会議をもってG20首脳会議はメンバーが一巡し、2026年には最初の開催国である米国に戻る。このことは、ちゃんと共同宣言の最後の部分に書かれている（2026年の米国での再会を楽しみにしている）。報道によれば、この部分に中国は異議を唱えたが、押し切られたようである。中国としては、できるだけG20を「反西側」に持っていきたいのであろうが、そのような地合いではなかったようである。

インドの「二股外交」ぶりを印象付けたのは、G20と同時に公表された「新経済回廊」構想であった。正確には「インド・中東・欧州経済回廊（IMEC）」と言って、南アジアから中東、欧州を鉄道や港湾で結ぶ構想で、「米国版『一带一路』計画」とも呼ばれる。単なる物流インフラにとどまらず、インターネットケーブルや水素を輸出するパイプラインの整備計画なども含む。昨年エルマウG7サミットで、バイデン大統領が提唱したPGII（グローバル・インフラ投資・パートナーシップ）の一環という位置付けである。

この計画の土台となったのが、「もうひとつのQUAD」とも呼ばれる「U2I2」（米国、UAE、インド、イスラエル）会合であった。2020年8月のアブラハム合意（UAEとイスラエルの平和条約）によって可能になった枠組みであり、2021年7月に初の合同会議を実施し、22年7月に第1回サミットを開催している。

今回のG20サミットでは「新経済回廊」の覚書が交わされたが、そこには回廊のルートに当たるサウジアラビアのムハンマド皇太子やEUのフォンデアライエン委員長らも出席している。アラブ諸国がイスラエルとともにプロジェクトに参加するのだから、まことに隔世の感がある。そこに米国と共に参画しているのがインド、という点が面白い。この動き、日本からは全くの「盲点」になっていたのではないだろうか。

¹ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/100550653.pdf>

●中ロから見たインド外交

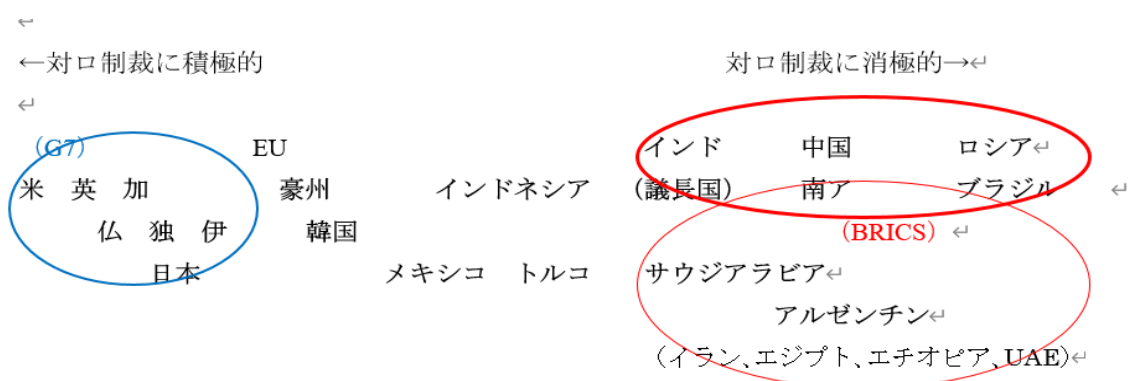
今回の G20 首脳会議は、ロシアのプーチン大統領、中国の習近平国家主席という「2 大巨頭」が欠席となった。インド政府が事前に準備した G20 メンバーの紹介 HP を見ると²、この 2 人が中央に来るように配されていて、いかにも皮肉に感じられる。

おそらく中ロの側からすれば、「インドは信用できない」と映ったのであろう。プーチン大統領は来月、北京で行われる「一带一路フォーラム」には出席の意向であるらしい。久々の外遊となるけれども、やはり「中国だけは信用できる」のであろう。

G20 に先立つ BRICS 首脳会議 (8/22-24) では、懸案となっていたメンバー国の拡大が決まった。サウジアラビア、アルゼンチン、イラン、エジプト、エチオピア、UAE の 6 カ国が新たに加わることになり、これらは「BRICS プラス」と呼ばれる。

新加盟国については、中ロがこれを強く求め、インドやブラジルは消極的であった。中ロとしては、BRICS の拡大によってグローバルサウスをなるべく「反西側」に持っていきたい。インドはそこまでは考えていない。今回、BRICS 拡大で賛成に回ったのは、「たぶんうまくいかない」と踏んだからであろう。BRICS 自体が「多様性」を売りにする枠組みであって、メンバーを増やすとますます「一枚岩」にはなれなくなるからだ。

○G20 は先進国 vs.中ロ vs.グローバルサウスに？



* G7 + 日米韓

* AUKUS/QUAD

* NATO + AP 4

* BRICS 首脳会議 + 新加盟 6 カ国

* 上海協力機構 (SCO)

* 「一带一路」フォーラム

インド外交は原理原則に欠け、何を狙っているのかが外からわかりにくいところがあるけれども、常に自国中心に考えて行動している点はいつそ痛快なほどである。グローバルサウスの大勢も、中ロの「反西側路線」に乗ってしまうのは怖いので、インドのような「天上天下唯我独尊」の外交姿勢の方が魅力的に見えるのではないだろうか。

² <https://www.g20.org/en/g20-india-2023/new-delhi-summit/> 単に国名の ABC 順になっているだけなのだが、バイデン大統領が一番下になっていることにも含めて、何かしらの作為を感じさせる。

●G20とBRICSに関する不条理

BRICS の拡大はなぜうまく行かないのか。新しいメンバーを増やすときは、それがたとえ「飲み仲間」であっても細心の注意が必要となるものである。得てしてそれで不協和音起きて、せつかくの仲間が分裂したりするものだから³。

ましてグローバルサウスの国々はさまざまな事情を抱えていて、互いに「地域の代表」や「安保理非常任理事国」の座を競って牽制し合っている。特に近年は、経済成長力や人口増加率に格差があって、ランキングが大きく変動していることがめずらしくない。

次ページに世界各国のGDPと人口の一覧表を掲げてみた。これを見ると、まずG20という枠組みがしみじみ不公平な扱いになっていることが浮かび上がってくる。

- * スペインとオランダは、GDP が大きくてもメンバーに入れてもらえない。その代わりに Eternal Guest という位置付けで、毎回 G20 に呼ばれている（発言権はない）。いかにも欧州らしい妥協の産物である。
- * GDP でも人口でも アフリカを代表する大国ナイジェリアは、G20 でも BRICS でメンバーになっていない。逆に言えば、南アフリカの存在感は小さい（2008 年の G20 創設時は GDP の順位が高かったが、その後は政治的混乱により低迷している）。BRICS プラスにエジプトとエチオピアが入ったことは、アフリカ代表として適切なのだろうか？
- * ラテン・アメリカを代表する大国としては、メキシコの方が GDP でも人口でもアルゼンチンより上である。たぶん中口の眼には、「メキシコは米国の言いなり」に映ったのであろうが、これではむしろメキシコが G7 側に接近しそうである。
- * 南アジアのパキスタンとバングラデシュは、GDP はともかく 人口では世界第 5 位と 8 位の座を占めている。もっともこれらの国が G20 や BRICS に手を挙げても、確実にインドが妨害して入れさせないだろう。
- * BRICS プラスにサウジとイランと UAE という産油国が入ったのは、「石油をドル以外で売りたい」というわかりやすい動機があるからだろう。ただし産油国全体の動きとは別物と見なければならぬ。

BRICS という枠組みを、真面目に大きく育てたいのであれば、真っ先にインドネシアとトルコという東西アジアの大国を入れるべきであろう。しかし中国はインドネシアを警戒しているし、NATO の一員であるトルコは到底、ロシアの信頼を得られる相手ではなかったのであろう。

つまるところ「反西側」という中口の狙いがある限り、グローバルサウスの国々はなかなかそちらには靡かない。彼らにとって、それは「損な取引」を意味するからだ。

³ 「なんであんなヤツを入れたのか」「あの人を入れるのなら、この人も入れるべきである」など、いろいろな理屈が飛び交うものである。

○世界の GDP&人口ランキング⁴

青は G7、黄色は G20、*は BRICS、☆は BRICS プラス

順位	国名	GDP (百万米ドル)	人口
1位	アメリカ合衆国	26,854,600	3億4000万人
2位	中国*	19,373,586	14億2570万人
3位	日本	4,409,738	1億2330万人
4位	ドイツ	4,308,854	8330万人
5位	インド*	3,736,882	14億2680万人
6位	イギリス	3,158,938	6770万人
7位	フランス	2,923,489	6560万人
8位	イタリア	2,169,745	5890万人
9位	カナダ	2,089,674	3880万人
10位	ブラジル*	2,081,235	2億1640万人
11位	ロシア連邦*	2,062,649	1億4440万人
12位	大韓民国	1,721,909	5180万人
13位	オーストラリア	1,707,548	2640万人
14位	メキシコ	1,663,164	1億2850万人
15位	スペイン	1,492,432	4750万人
16位	インドネシア	1,391,778	2億7750万人
17位	オランダ	1,080,880	1720万人
18位	サウジアラビア☆	1,061,902	3690万人
19位	トルコ	1,029,303	8580万人
20位	スイス	869,601	880万人
21位	台湾	790,728	2357万人
22位	ポーランド	748,887	4100万人
23位	アルゼンチン☆	641,102	4580万人
24位	ベルギー	624,248	1170万人
25位	スウェーデン	599,052	1060万人
26位	アイルランド	594,095	510万人
27位	タイ	574,231	7180万人
28位	ノルウェー	554,105	550万人
29位	イスラエル	539,223	920万人
30位	シンガポール	515,548	600万人
31位	オーストリア	506,601	900万人
32位	ナイジェリア	501,354	2億2380万人
33位	アラブ首長国連邦☆	498,978	1010万人
34位	ベトナム	449,094	9890万人
35位	マレーシア	447,026	3430万人
36位	フィリピン	440,901	1億1730万人
37位	バングラデシュ	420,516	1億7300万人
38位	デンマーク	405,626	590万人
39位	南アフリカ*	399,015	6040万人
40位	エジプト☆	387,110	1億1270万人
参考:			
	イラン☆	367,968	8920万人
	パキスタン	348,300	2億4050万人
	エチオピア☆	156,083	1億2650万人

⁴ <https://elemminist.com/article/2710> <https://elemminist.com/article/2084>

●インドの勝利、グローバルサウスの時代

今回の G20 サミットにおける最大のミステリーは、「なぜ習近平は欠席したのか」であろう。国内経済が急激に悪化している、北戴河会議で一悶着あった、など諸説が飛び交っているけれども、もちろん真相は「藪の中」である。

ただし振り返ってみると、今年の G20 では「中国とインド、どちらがグローバルサウスの盟主か」という抗争が水面下で行われていて、最終的にインドが勝った、もしくは中国の不戦敗に終わった、と見るのが適当ではないだろうか。

インド外交としては、今回の G20 には達成感があることだろう。何しろ共同宣言は出せたとし、「新経済回廊」では米国と欧州と中東に恩を売ることができた。そして何より、「西側には与せず、中ロにも靡かない」というグローバルサウスのお手本となる道筋を示すことができた。こうした路線は、来年（ブラジル）と再来年（南ア）の G20 にも引き継がれていくだろう。

その一方で、中国とインドの間にそれほど大きな隔たりがあるとも思えない。強いて言えば、中国外交が盛んに「100年にわたる屈辱の歴史」を強調し、「戦狼外交」のような強硬姿勢を打ち出すのに対して、インドは「200年にわたる植民地時代」のことをあまり表に出さない。それでもけっして忘れていてではなく、「いずれ先進国を見返してやろう」という思いを秘かに抱き続けていることだ。西側から見れば中国は「危険」な存在だが、インドも「未恐ろしい」存在だと受け止めるべきだろう。

グローバルサウスの国々の多くも、そうした「歴史問題」を共有していることを忘れてはならない。今はまだ表面化していないが、いずれさまざま形で噴出してくるのではないだろうか。加えて彼らは、「開発」や「気候変動」の問題で先進国の身勝手さを感じているし、「人権」などでお説教をしたがることにも辟易している。

ロシアについて言えば、確かに彼らがやっていることは悪い。ただしロシアは、シリアやアフリカでも似たようなことをやっていた。それらを見過ごしておいて、なぜウクライナだけを庇うのか。それは西側のダブルスタンダードではないのか。

かかる「グローバルサウスの論理」は、少しずつ賛同者を増やしつつある。もはや「西側の価値観」はグローバルなものでなくなりつつある、という点には注意が必要だ。

日本外交は5月の広島 G7 サミットにおいて、「グローバルサウスへの関与強化の必要性」を打ち出した。広島における「地政学」「食料」「環境・エネルギー」「デジタル」などのテーマは、多くがニューデリー G20 サミットに受け継がれることになった。それは大いに結構なことながら、G7の地位が相対的に低下していることは認めざるを得ない。

昔は G7 は「仰ぎ見られる存在」であったかもしれないが、今は G20 の中で「約半分程度の意見」を占めるに過ぎない。その G7 がグローバルサウスを取り込む、というのは、何とも遠大な目標であるように思われてくる。

<海外報道ウォッチ>

バイデン大統領は2期目を断念すべきなのか

(観察対象：The New York Times/Washington Post/Cook Political Report)

9月に入ってから、リベラル派各紙で急増しているのが、「バイデンは2期目を断念すべきでは？」との声である。高齢のバイデン氏にはどうしても不安が付きまとい、有権者の支持は盛り上がらない。民主党内は、党幹部と一般党员の間で意見が割れているという。

9月17日のNYT紙記事、”**Top Democrats’ Bullishness on Biden 2024 Collides With Voters’ Worries**” (民主党幹部の強気な2024年バイデン支持が、有権者の懸念と衝突している)⁵がこの間の事情を詳しく紹介している。

- * 大統領の再選をめぐる党エリートと有権者の不和は、民主党を数十年来にないレベルの不一致に直面させている。バイデン陣営と関係者は、トランプとバイデンの二者択一の選挙になれば、党内の反対意見の多くは来年には消え去ると主張する。
- * しかし有権者の多くは、就任式当日に82歳になるバイデン氏が、あと4年は耐えられないのではないかと心配している。党のベテラン戦略家であるジェームズ・カービルは、「熱意の欠如が投票率の低下につながる」ことを懸念している。CNNの今月の世論調査によれば、民主党支持者の67%がバイデン再選を望まないと回答している。
- * 民主党幹部は、オフレコの間では懸念があることを認めている。しかし公の間では、バイデン勝利への自信に満ちている。バイデン氏への挑戦は不誠実と見られるだけでなく、失敗する確率が高いし、本選挙で不利に働く怖れがあるからだ。
- * 今のところ著名候補者が遅れて挑戦する兆しはない。とはいえ、年末までに大統領が不出馬の意向を示せば、たちまち多くの政治家が参戦するとの観測もある。

「米国民は高齢者に偏見を持ち過ぎだ」という声もあれば、「ジョーはあと4年持つのか?」「彼は少し、いや、かな〜り老けている」といった遠慮のない声もある。「バイデン氏とトランプ氏の争いに、誰もが疲れ切っている」というのは確かにそうだろう。

ところでこの話、誰が「言い出しっぺ」なのか。筆者はワシントンポスト紙の著名コラムニスト、デイビッド・イグネイシャスの9月12日付”**President Biden should not run again in 2024**” (バイデン大統領は再選出馬すべきではない)⁶ではないかと睨んでいる。

- * バイデンは目覚ましい勝利を重ねてきた。トランプを破り、中間選挙でも勝ち、司法省はトランプを裁こうとしている。二極化した国家でセンターからの政治を行い、米国自身が戦争に巻き込まれることなくウクライナを支援している。有能な大統領だ。

⁵ <https://www.nytimes.com/2023/09/17/us/politics/biden-democrats-voter-concerns.html>

⁶ <https://www.washingtonpost.com/opinions/2023/09/12/biden-trump-election-step-aside/>

- * これを言うのは心苦しいが、バイデンとハリス副大統領は再選を目指してはいけない。その場合、バイデンはおのれの最大の功績を無に帰すリスクがあると思う。
- * 国民の 77%は、バイデンがあと 4 年は務まらないと考えている。そしてハリスの支持率は 39.5%とバイデンよりも低い。国内はおろか党内でも支持を得られていない。
- * バイデンは断るのが得意な人ではない。ペローシ下院議長の訪台は止めるべきだったし、息子のハンターが外国企業の役員になるのを阻止すべきだった。今度は自分自身にノーを言うチャンスだ。彼らしくはないが、国にとっては賢明な選択となる。
- * もはや時間がない。私はバイデンが再出馬について自問自答し、国とすり合わせてくれることを希望する。トランプを止めるには誰が最適か。それが問題だ。

“The Last Politician”（今月出版されたバイデン評伝の書名）への敬愛溢れた文章は、さながら「泣いて孔明を斬る」の感がある。確かにこの 3 年間のバイデンは成功していた。しかし「もう 1 期」は欲張り過ぎだし、副大統領の「差し替え」も容易なことではない。

さて、実際問題としてバイデンはどう出るのか。ここで不出馬宣言をしたとして、間に合うのか。最後はいつもの The Cook Political Report を頼ることにしよう。9 月 14 日付のチャーリー・クックの分析は”**The Case for Biden to Step Aside**”（バイデン退陣説を問う）⁷。

- * バイデン大統領が、2 期目を目指す決断を覆すと信じるべき理由はどこにもない。本人はもちろん、スタッフも側近たちも選対本部も、何のシグナルも発していない。
- * しかし最近のデータを見る限り、バイデン再選が良いアイデアなのかは疑問を感じる。民主党は総得票数では確実に勝てる。問題は選挙人数 (Electoral Vote) で 270 を超えることで、場合によっては 6~7% 差で勝つ必要がある。これは容易ではない。
- * バイデンに退陣圧力がかからないのは、①党内で個人的に好かれている、②イデオロギー的にも党と一致、③ハリス副大統領には準備ができてない、などの理由による。
- * バイデンが退く確率は 5 分の 1 以下だ。選挙で選ばれた大統領が 2 期目を見送ったのは過去にポーク (1848)、ブキャナン (1860)、ヘイズ (1880) の 3 例だけである。
- * 出馬を断念するには早期の決断が必要となる。年内に出馬申請期限がある州が少なくないからだ。ネバダ州は 10 月、アラスカとアーカンソーは 11 月、カリフォルニアやイリノイ、ノースカロライナ、オハイオ、テキサスは 12 月だ。
- * バイデンは、半世紀かけて準備してきた今の仕事を心から楽しんでいる。2020 年にそうだったように、トランプを倒せるのは自分しかないと考えているだろう。

まるで「四人のジレンマ」のごとき状況である。「トランプ対バイデン以外」ならトランプが負けるだろうし、「トランプ以外対バイデン」ならバイデンが負けるはず。それでも「トランプ対バイデン」に収斂する確率が最も高い。何とも疲れる構図である。

⁷ <https://www.cookpolitical.com/analysis/national/national-politics/case-biden-step-aside>

<From the Editor> 祝！阪神タイガース優勝

あっけないくらい簡単に「アレ」が達成されました。阪神タイガースが18年ぶりのセ・リーグ優勝であります。8月に早々とマジックが点灯し、「さあ、これからが大変だ」と思っていたところ、9月に入ってから破竹の11連勝。9月14日には決まってしまいました。

なぜ今年のタイガースが強いかと言うと、近年のドラフトが奇跡的に成功しているのですね。こんな感じです。

- * 2022年 1位 森下翔太（3番打者・外野手）
- * 2020年 1位 佐藤輝明（5番打者・内野手） 6位 中野拓夢（2番打者、内野手）
- * 2018年 1位 近本光司（1番打者・外野手） 3位 木浪聖也（8番打者、内野手）
- * 2016年 1位 大山悠輔（4番打者・内野手）

なぜか見事な隔年現象があるのですが、近年はドラフト上位選手がちゃんと育ててチームの軸になっているのです。筆者の阪神タイガースファン歴はほぼ半世紀ですけど、ドラフト1位といえば田淵幸一（68年）の次は岡田彰布（79年）、その次は今岡誠（96年）と鳥谷敬（03年）というくらい成功例が少ないチームで、むしろ外人やトレードで迎えた選手が活躍するチームなのです。これだけ生え抜き選手が多いことはめずらしい。

これだけ選手を内部で育てているからには、今の強さはホンモノなのでしょう。投手陣もコマが揃っているし、とりあえずクライマックスシリーズは負ける気がしません。今週はオリックス・バファローズの優勝も決まったので、10月28日から始まる日本シリーズのことを、今からゆっくり考えるという贅沢な時間が与えられておるわけです。なにしろ日本シリーズでは、2003年も2005年も大敗しておりますからな。

しかるに日本シリーズ対策と言っても、これといった名案があるわけではない。打線は今のままで行くしかないし、それでダメならしょうがない。

おそらく問題は投手起用。第1戦を誰に投げさせるべきなのか。防御率から言ったら村上頌樹の一択なのだが、オリックスの初戦は山本由伸であろう。これは正直、打てるような気がしない。いや、打線は水ものなので、それこそ佐藤輝明がスカコーン！と打ってくれるかもしれない。しかるにそれはまったく計算が立たないので、「日本シリーズは第2戦が勝負」というセオリーに沿って、村上は第2戦に起用したい。

第1戦はベテランで西勇輝ないしは青柳晃洋であろう（青柳は昨晚打たれちゃったけど）。第3戦は伊藤将司、大竹耕太郎、才木浩人の中から、いちばん調子がいい投手を。こうやって考えていくと、なんだか勝てそうな気もしてくる。いや、これぞ「取らぬ狸の皮算用」というやつで、でも「トラたぬ」は阪神ファンの常なのである。ああ、こんな妄想を1か月も楽しめるのであるから、今年はなんて恵まれているんだろう。

いや、ラグビーの W 杯も応援しなきゃいけないとは思っているのだけれども、ついついこっちが先に来ってしまう。だって 18 年ぶりなんだもん。どうかお許しを。

* 次号は 10 月 6 日（金）にお届けします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-socket.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com